

八七 乾 百内

百内、字は景憲、松翁と號し、又雲隣庵とも稱せり。文化十四年五月仲多度郡中村に生る、幼より讀書を好み、父母に仕へて甚だ孝なり、されば、皇漢の史籍佛典は更なり、詩歌俳諧の諸書を涉獵し、尙音樂、插花の道に至る迄、廣く之を修得せり。數年の後郷里に歸り力を教育に致せり、明治廿四年二月十八日歿す、歳七十五歳、著す所讚岐古今物語あり。

以上は百内に就て、讚岐人名辭書所記全文である。百内は此外に松廼舎・松子・蒼髯齋などの號があり、其先、平景政より數世、子孫相分れ讚岐多度郡雨霧城に居し、更に支分地を得て同郡中村に屯した、其墟の内外の濠儼存し、遠祖景政の祠が巨樹の中に在り、乾姓は同村の地名に因るものである。文中「數年の後郷里に歸り」とあるは唐突で、或は都に上つたとしてもいふか、然るに百内の裔孫乾猷平氏によれば「若年より私塾を開き、子弟を薰陶藩主京極侯より表彰せらる」とあり、又著述は讚岐古今物語の外、讚岐野史・浮説紀聞・雲隣誌稿・萬都廼家

歌集・松翁句集等があり、詩歌句何れにも通じたのであつた。

明治維新學制頒布の際、百内は聯區監視を拜命したが、家裕なれども常に質素を旨とし、會て絹布を纏はず、世態一變して邸宅衣服に上下の制が無くなり、輕薄の輩が華美な衣住を恣にするを見て、常に慨嘆したので、是等のものが途に百内を避けたといふ美談が傳はつてゐる。

明治二年大詔により、天下善行の士の旌表せられし時も、其選に洩れなかつた。

讃岐の勤皇家日柳燕石、百内と交遊あり、百内四十二歳の賀に、一詩を賦して百内に寄せた。曰く

松翁健似松。風骨凌霄勢。壽筵無限春。何啻一千歲。

百内文化十一年五月に生る、上記十四年は誤で、隨て享年は七十八歳である。百内の次子健醫を以て聞え、讃岐人名辭書・仲多度郡史等に收載され、其長女美都留も亦歌名がある。近年物故の猷平氏、蕪村研究家として高名なりしこと、世間周知の如くである。